

## 比較文化論

## ー日本とフランスに於けるルネサンスー

渡辺 誠一

La culture comparative—Renaissance : Le Japon et La France—

Seiichi WATANABE

ルネサンスの再生・復興は文芸に限らず、人間生活の更新・興隆や、環境の拡大を含む文化概念、歴史概念にも適応されている。ヴァザーリは「イタリア人のみが、中世を乗り越え、栄光の古代を復活させた」と喧伝した。しかし、古典の復興を意図した文化運動は、9世紀にフランク王国に、また12世紀に全ヨーロッパに起こっていた。日本に於いても、同じ現象が既に中世に生じていた。日本の歴史では、古典復興現象が周期的に訪れており、その中でも最大の古典復興は桃山時代であった。それは、ヨーロッパのルネサンスにも比せられる再生現象であった。

日本に於ける中世は、無常観がひとつの世界観として中世全域に涉って深く浸透し、中世独特の文化を生み出した時代であった。鎌倉時代前期に書かれた『平家物語』・『方丈記』は、典型的な無常文学である。『平家物語』では、流転無常の世の中が崩壊感覚で巧みに描かれ、盛者必衰の理が当時の貴族社会によって例証されている。『方丈記』では、打ち続く

変乱・災厄・天変地異、その結果生じた飢渴状態が語られ、人生の無常が説かれ、処世の悩みが論じられている。吉田兼好もまた、人生は儚く無常であり、この世はすべて夢・幻・無である、と世間の実相を捉えていた。しかし兼好は、無常の世の中や人生をただいたずらに嫌厭したり、感傷的になったりして、当時の無常観に浸ってはいなかった。

人間は必ず死ななければならぬ。これは判然とした事実である。だから現在の生を哀惜しなければならないのだ、と無常である現実を捉え直し、死に対する嫌悪・憎悪を生に対する愛へと転換したのである。兼好は、醜い現実を冷静に見つめ直し、醜悪なものは醜悪なもの、頼むべからざるものは頼むべからざるものと悟り、自分の生を積極的に活かすという生活態度を獲得した。それまで打ち続けた無常観を逆転させ、新しい行き方を生み出したのである。これは、兼好の人生に対する価値観が一変した結果である。王朝貴族社会の崩壊期に、天変地異などの惨状を目撃して、その悲惨な現状から逃避して、日野山の庵に心の安定を求めた鴨長明の消極的な態度と、不穏な乱世・矛盾した人生・世界の種々相をそのまま受け入れ、却ってそこに新しい生き方と安定した生を見つけ出そうとする吉田兼好の積極的な態度との間には、大きな違いがある。兼好の場合、神道教義のような借物の理論ではなく、日々の現実生活を反省することによって到達した人生観・世界観を生きていたのである。つまり、真の人間性という立場から自己を変革し、新しい生き方を意識的に生きていたのである。この段階に於いて、既にルネサンスに通じる近代化が始まっていたと見做すことができる。